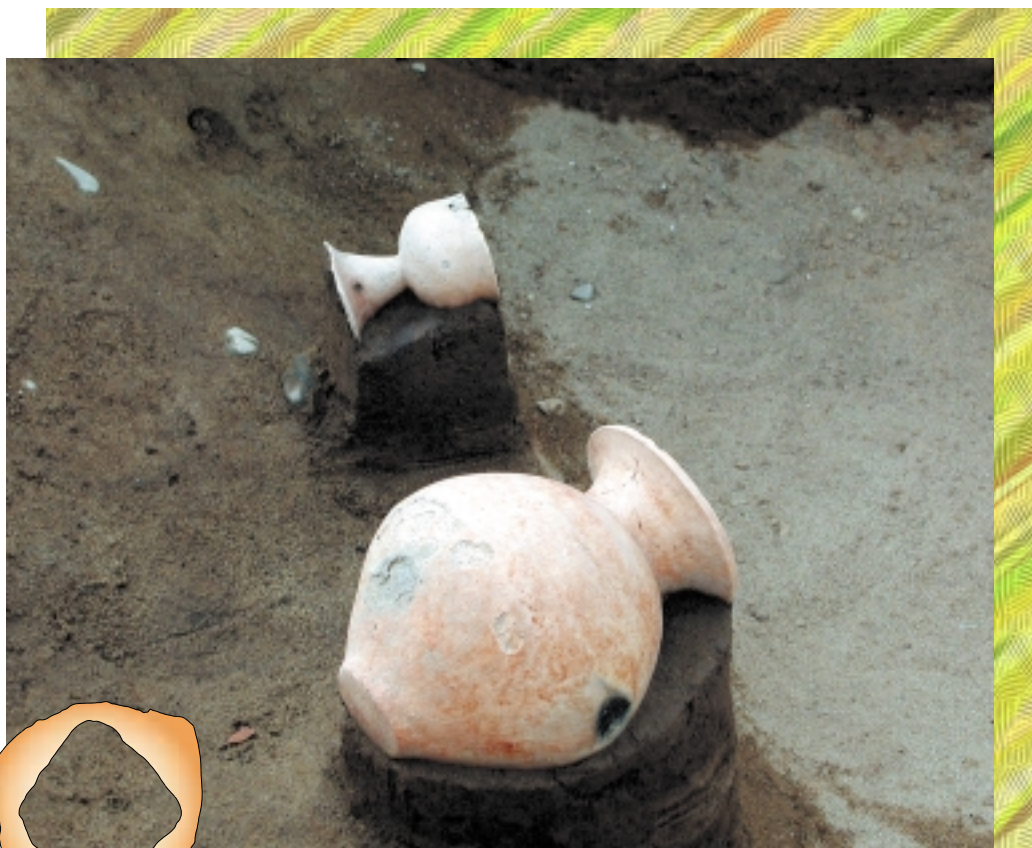


まいいぶん 愛知



山中式の高杯・広口壺（弥生後期）



貝田町式の細頸壺（弥生中期）

弥生後期の墳丘墓
(2000年度A区)

弥生中期の方形周溝墓
(1999年度C区)

弥生の墓に供えられた土器（一宮市／猫島遺跡）

弥生時代中期の環濠集落、一宮市千秋町猫島遺跡の一隅で弥生後期の墳丘墓が発見されました。墓の周囲にめぐらした溝には流麗なシルエットの山中式土器（広口壺・ワイングラス形高杯など）が置かれていました。また弥生中期の方形周溝墓からも貝田町式の細頸壺がみつかっています。時期こそ違いますが、墓に土器を供えるならわしは同じだったようです。何か入っていたのでしょうか？亡き人の魂がああ世でひもじい思いをしないための心尽くしでしょうか。それとも祖先の霊と共に過ごす年毎の祭りに供えられたものか。時間はすべてを土に還し、土器を傾けても砂がむなくこぼれでるだけです。

墓が築かれて二千年。時代はいま、次なる一千年紀の始まりを迎えました。（埋文センター 洲崎和宏）

ほ まいぶん「掘」っとらいん

今年度、これまでに行われた県内発掘調査事例のなかから、話題となった戦国時代、近世の城郭調査（小牧市・小牧山城、岡崎市・岡崎城菅生曲輪跡）と、弥生時代前期および古墳時代はじめ時期の特殊な埋葬形態が確認された東海市・烏帽子遺跡について紹介します。



龍城図（岡崎市）よりイメージ



小牧山城

小牧市堀の内一丁目

左 / 調査地点全景

（永禄期の堀と天正期の土塁）

中 / 永禄期の武家屋敷を囲む堀

下 / 井戸枳材が出土した永禄期の井戸



史跡小牧山整備計画に基づき、平成10年から小牧山東麓の発掘調査を行っています。小牧山城は永禄6年（1563）に織田信長が築いた城跡で、同10年に信長が岐阜城に移り廃城となりました。天正12年（1584）小牧・長久手の合戦が起こると、徳川家康軍の陣城として大規模な改修を受けました。

今回の調査地点は、小牧山北東麓、天正期の陣城で小牧山を取り巻く土塁の内側の帯曲輪として使われた地点です。天正期の遺構は土塁だけでしたが、土塁の下層から堀や井戸が発見され、永禄期には小牧山の東麓から北麓にかけて、一辺45m程の規模の武家屋敷が多数配置されていたことが確実になってきました。

（小牧市教育委員会 中嶋 隆）

岡崎城の調査は、中心市街地活性化事業に先立ち行われています。今年度の調査は6月より開始し、現在は全体の約6,000㎡を3地区に分けた区目を調査中です。近世の絵図や地籍図にほぼ対応するかたちで、堀跡や土橋、それに伴う石垣、屋敷地の区割りのための溝や瓦列が確認されています。他の遺構では井戸（石組みと瓦組み）、廃棄土坑を埋納した土坑などがあり、遺物は17～19世紀のものが中心で、城主の家紋入りの瓦、瀬戸美濃焼、肥前系磁器、常滑焼、信楽焼、土師器皿、内耳鍋・土器羽釜、焼塩壺、漆器、銭などが多様に出土しています。

これらから、絵図からは知ることのできない当時の人々の生活を垣間見ることができます。

（岡崎市教育委員会 近藤美紀）



岡崎城菅生曲輪跡

岡崎市康生町

上 / 石組み井戸

中 / 胞衣皿（えなざら）埋納土坑

（胞衣皿とは、子供が産まれた際にその成長を願って胎盤を家の出入口や縁の下に埋納したもので、ここでは容器として土師器皿を合わせ口にして使用した。I区では土坑1基から、II区では土坑1基と付近で胞衣皿のみ（2組）が検出されている。）

右 / I区全景

（手前石垣は菅生曲輪を東西に横断する水堀の跡）



多数の見学者が集まった現地の説明会では、弥生時代前期の土坑墓（写真上）、ガラス製勾玉や小玉、緑色凝灰岩製管玉など計35点余りが検出された古墳時代の土坑（墳丘墓の埋葬施設か）が紹介されました。



壺の検出状況

烏帽子遺跡

～下呂石が詰められた壺～

東海市高横須賀町烏帽子

壺は弥生時代前期に属す水神平式と呼ばれる土器で、上半分は風化して小さな破片になっていました。長さ1.95mほどの細長い穴の上から出土したので、お墓のお供えとして置かれたものと思われます。下呂石はいずれも5cm前後の小ぶりの河原石で、木曽川下流で採取されたもののようです。当時の人々が下呂石を壺に入れて運んでいたのかどうかわかりませんが、濃尾平野と知多半島をつなぐモノの流れがあったことはこれによって明らかになりました。

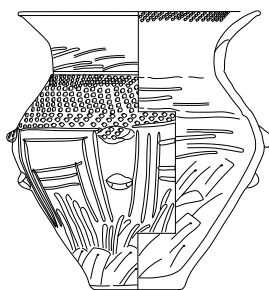
（愛知県埋蔵文化財センター 石黒立人）

煮炊きする壺形土器

—猫島遺跡出土の沈線紋系土器—

愛知県一宮市の猫島遺跡で、平成11年度の調査(99H区)において、弥生時代の環濠(SD01)から沈線紋系土器が出土しました。土器は、環濠がごみ捨て場となった弥生時代中期中葉(貝田町式)の土器などと一緒に出土しました。

出土した沈線紋系土器は、器高14.9cm、口径13cm、低径4.8cmの比較的小型の壺形土器です。口縁内面と頸胴部には櫛状工具による刺突紋、胴部には縦2段1組の瘤状突起が4箇所、その間を重コ紋で埋める紋様が施されています。底部外面には布目痕が付いています。器壁には煮炊きした痕跡がついています。



S = 1 / 4



以上の特徴は、沈線紋系土器の特徴をよく示しています。ただし、櫛状工具による刺突紋、

底部外面の布目痕は、沈線紋系土器の施紋・製作規範(土器製作のルール)には認められない特徴です。これらは、条痕紋系土器にみられる特徴です。沈線紋系土器の分布は条痕紋系土器の分布とほぼ重なり、遺跡で見つかる場合も一緒に出土します。ただし、それぞれの施紋・製作規範は相容れない関係です。今回紹介した猫島例のように条痕紋系土器の要素を取り入れる事例は最近になって増えつつあります。例えば、稲沢市野口・北出遺跡、清洲町朝日遺跡などで確認されています。

(愛知県埋蔵文化財センター 永井宏幸)

編集後記

今年度も調査を行った遺跡の現地説明会には多数参加していただきましてありがとうございます。現在、こうした情報についても当センターのホームページ上で随時紹介しています。メールを介しての様々な問い合わせ件数も増えました。

これからも、どんどん！ご活用ください。



平成12年度12月までに
愛知県埋蔵文化財センターが
行った現地説明会資料



まいぶん愛知 No.63

発行 平成13年1月31日

編集 (財)愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017

愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田野方802-24

TEL 0567-67-4163 FAX 0567-67-3054

http://www.maibun.com E-mail: doki@maibun.com

印刷 クイックス